

感謝の言葉

「いただきます」

「食べる」ということは、わたしたちが生きたために切り離せないこと。そして「食べる」は、自分以外のイノチからできています。

食事の前の「いただきます」という言葉。皆さんは、その意味を考えたことがありますか？

江迎地域の山の中、大きな放牧場で約80頭の豚が飼育されています。

豚は生まれて出荷されるまでの間、ここで伸び伸びと育ちます。

そして、この豚を飼育している親子が仲良く暮らしています。

「農は健康な人をつくる」

いつもこの言葉を胸に365日休むことなく、豚の世話をする2人。

大切に大切に育てた豚を食肉として送り出すこの親子に、イノチの話を聞きました。



Interview
放牧養豚農家 たくお
林由美子さん・拓生さん
江迎町奥川内・味菜自然村

「いただくのは命だから いただきます」は感謝の言葉

息子がアメリカ力でお世話になっていたホームステイ先は、とても素敵なお宅でした。自給自足の生活で、牛・豚・鶏などの家畜を放し飼いし、家族の一員のようにかわいがっています。そして感謝祭などのイベントのときに、豚を1頭丸ごと食べるんです。肉だけでなく、血も内臓も。とにかく1頭を上手に、保存できるように加工して、みんなで食べるそうです。そして、食事のたびに命に感謝するお祈りをします。「命をいた

かせていただきます。生きていることに感謝します」と。そんな素敵な家族の中で過ごしていた息子は、帰国してこの江迎の土地を見て「ああ、ここで豚を飼いたい！」と思ったみたいです。

豚が幸せに暮らすことで 人間が健康な食を得るんです

毎日車で70分走り、できるだけ栄養士さんがいるような病院などの施設の残飯をもらって来て、大きな鍋で煮詰めて乳酸菌入りの餌を作ります。ここでは合成飼料や薬で無理に太らせたり生かししたりしないんです。

出産、育児、成長して出荷するまで、豚は自然な環境で育ちます。母乳で育った子豚は、そのまま母豚と一緒に放牧場で暮らします。野山や竹林を駆け回り、木の実や雑草を食べて過ごします。中にはタケノコや自然薯を食べる豚もいるんです。自由に過ごすので、豚はストレスを感じることがなく、無駄に鳴いたりしません。鳴くのはごはんのときだけ。食肉センターに連れて行くときさえ、騒いだりしないんです。

ここで飼われている間は、豚たちには思い切り幸せに暮らしてもらいたいと思っています。その結果、人間がおいしく、しかも安心して健康につながる食を口にすることができれば、豚たちも家畜として本望ではないでしょうか。

出産や育児はとても嬉しく 育てる難しさも教えてくれる

そうは言いながらも、失敗もしましたよ。とてもショックだったのは、生まれたばかりの子豚が一度に3匹も死んでしまったこと。冬は子豚のために20度の地温を保たなければなりません。そこで体の上にも被せられるようにと、たくさんの稲わらを入れてあげました。そうしたら子豚が稲わらに潜ってしまった。母豚が気付かずにその上に横になってしまったんです。家畜は、たかがわいがって育てるだけでは駄目なのだ分かりました。豚に限らず、お産や育児から得る命の学びに勝るものはないのかもしれないですね。わたしも2人の子ともたちに、たくさんのことを教えてもらいましたから。

取材中に立ち会ったお産は一日がかりの難産でした。生まれてすぐ母豚の下で圧死したり、死産だったり。羽朝、死んだ子豚の亡きからの横で、生き残った子豚が一生懸命母乳を飲んでいました。子豚はこの世に出るすぐ、自分でその緒を切っておっぱいまで自力で歩きます。強く美しい光景であると同時に、生きることの厳しさを実感した出来事でした。





特集 イノチのハナシ

生まれるという奇跡

助産師という仕事があります。古くは「お産婆さん」と呼ばれ、地域のお産を支えてきた人。助産師は医者以外で唯一、分娩を取り扱える仕事です。

「お産は病気ではない」とはよく聞きますが、人間が一人増えることは、当事者家族にとっては一大事。今は病院での出産がほとんどですが、昔は多くの人が、住み慣れた自宅で出産していました。

今となつては思い切った選択肢となった自宅出産を、優しくサポートする助産師さんがいます。彼女とお母さん、その家族で「とつきとおか」温められられたイノチは、どんな時間を経てこの世に誕生するのでしょうか。

どうかこの話を、他人事とは思わず

「自分がどのように生まれてきたのか」に置き換えて少しだけ考えてみてください。

年齢分の年月をさかのぼったイノチの現場に、間違いなく自分がいた、ということ。

イノチは簡単にはつくることができない。

そして、生まれるということは、わたしたちに与えられたチャンス。

井田裕子さんが助産師になったのは27歳のときでした。9年間の産婦人科病棟での勤務を経て開業。助産所を持たず出張助産師という形で、妊婦さん・産婦さんのサポートをしています。開業して5年半。41人の赤ちゃんが、井田さんに見守

られて誕生しました。平均寿命が延びている今、女性のライフサイクルも一昔前とは違いを見えています。助産師の仕事も多岐に渡り、思春期から成熟期・更年期・老年期と、女性の一生をサポートします。彼女が見つめる命の現場とは、どんなものなのでしょう。

お産は学びの現場
赤ちゃんが教えてくれるの

わたしはお産が好きです。だから助産師になりました。赤ちゃんとお母さんの関係がとても好きなんです。赤ちゃんってすごいんですよ。お産は学びの現場。わたしにとってもお母さんにとっても。

赤ちゃんは産道を通るとき、回りながら出てきます。骨盤は上から見ると入り口が横長、でもこの世への出口は縦長です。産道が狭いときは、自分で頭の骨を重ねて進みます。そして通り道の形に合わせて頭が出たら肩をねじる。ちゃんと自分でお母さんの体の形に合わせて前に進むんです。そして赤ちゃんがこの世に生まれてくるとき上げる産声、あれは、泣いているわけではないんです。生まれて初めての「呼吸」なんです。お母さんの産道から出るときに、ギューッと圧力がかかっている状態からパーン！と外に出るでしょう。そのときに外気の刺激がある、それは目覚めるという感覚。おなかの中から外に出たそのとき、スッと息



写真左上の赤ちゃんと井田さん(9月)。

を吸って吐き出す。その吐き出す息が「おぎゃあー」という産声なんです。赤ちゃんも外で生き抜くために、産道を通ってくるときに準備するんですね。そこから出た途端、「おなかすいたよ」「眠いよ」「おむつが濡れてるよ」など、すべてを自分で訴えなきゃいけないんですから。

育児は思い通りにならない
自我を認めて許すのが愛

わたしね、育児をしている人にもいつも「子育てって自分の思うようにならないってことを知ることよ」と言っています。自分と全く違う人間を育てるんだから、その人にも自我があるわけでしょう。自分の価値観を押し付けては駄目。「こいつうぶうぶに育ってほしい」という親の思いはありますよね。子どももそれに応えようと、自分なりに一生懸命になります。でも、やっぱり親が思うようにはならないこともある。それを認めて、受け入れて、許すことが親であり、愛だと思うんです。もちろん社会のルールは教えてあげなければいけません。自由という言葉をはき違えると大変ですから。ルー

ルをきちんと守って、そのラインの内側で、どれだけ自分の力を発揮できるのか、個性を磨けるのかを、わたしたち助産師もお母さんも、頭を柔らかくしてしっかり導いてあげたいですね。もう一つ。子育ては10年20年続くことだから、楽しく取り組んでほしいです。子どもはたくさんのお話を教えてくれます。お互いに悩んだり苦しんだり喜んだりしながら、いろいろな感情が生まれてきます。日々、試行錯誤の中で、一緒に成長していくのだと思いますよ。

与えられたチャンスと時間
思いやりの気持ち忘れずに

命がある、命が生まれる、というのは自然の摂理であって、決して人にはどうすることもできない力が働いていると思います。そういうのを「運命」とか「奇跡」とか言うのでしょけど。命は言わば自分に与えられた「チャンス」ではないでしょうか。そして「生きる」ということ。これは自分の置かれた境遇の中で、その命を誰のためにどのように使うのか、与えられた「時間」のこと。「命」あつての「生きる」である以上、自分の命も他人の命も同じように大切に。自分も他人も大切に生きていきたいものです。思いやる気持ちを忘れずに。みんな同じように最初の呼吸を祝福されて生まれてきたのだから。

記憶に生きる花を活ける

ことし7月、三浦町の花壇で、園児や小・中学生が植えた花の苗約百本が心無いいたずらで荒らされてしまいました。

しゃべらないから、目に見えて笑ったり、泣いたり、怒ったりしないから、イノチがあることを意識しづらい植物。

しかし、種をまき、水を与え、日の光を浴びると、芽を出し、茎を伸ばし、葉を広げ、花を咲かせて応えてくれます。

幼いころから植物が大好きだった少女は、大好きな花を自ら「切る」職業に就きました。

フラワーアーティストである彼女は花にはさみを入れるとき、何を思い、どんなふうにかのイノチと向き合っているのでしょうか。

Interview
フラワーアーティスト
吉村 舞さん
重尾町・オランダの花屋さん



テレビを見るより、絵を描いたり自然の中でぼんやりとすることが大好き。そんな少女時代を過ごした吉村舞さんは、草花栽培農家に生まれました。幼いころから植物とともに育ち、やがてオランダでフラワーデザインを学びます。各国を旅した後、フラワーアーティストとしての道を歩む彼女は、平成20年、「花を切る」ことをテーマにした「生の間」という作品展で花を活けるパフォーマンスを行います。そのときの彼女の思いや、その後の仕事を通して感じる命への思いを聞きました。

花を活けることで気付いた 今という瞬間の大切さ

本当に花が好きだったら、周りの草花を切らずに、かわいいなって眺めるだけの方がいい。でもわたしは花が大好きなのに、活けるためにはさみで切っている。切るということは花が死に向かう、つま



り枯れるということにつながります。

「自分は本当に花が好きなのだろうか？」オランダにいたとき、その矛盾に悩みました。ただ、当時はそれ以上に表現することが好きだったので、時間をかけて答えを見つけていくこと、一度その矛盾について考えることをやめ、学ぶことに集中しました。その後、作品展「生の間」で花を活けたとき、当時から成長していない自分に気づき、もう一度その矛盾について深く考えることになりました。

わたしの中にはいつも「表裏一体」という言葉があります。表は生きている部分、裏はまだ生まれていない部分、死んでいなくても密接で切り離すことができません。どちらも同じくらい大切なことだから花も、切って枯れることを考えるのと同じくらい、生きて生かすことを考えるのも大切だと気づきました。しっかりと意識を持って活けた花は、枯れてなくなっても関わった人の記憶の中で生かされるんです。作品展のとき、生死とその間の「今」という瞬間ばかりを考えていたので、自分自身が生きている今がとても大切だと思えました。そしてそれを意識すると、自分の呼吸や歩く一歩までが、美しいものに感じました。

純粋な気持ちを届ける それがお花屋さんという仕事

この仕事は、出産、お誕生日、お葬式、

一周忌、お盆など、人の生や死に関わる

ことが多いです。植物はわたしにとって、贈る側の人の思いを届けるコミュニケーションの手段なんです。お花を贈った人、届けられた人の記憶に残る、もちろん活けたわたしの記憶にも残る。そうした人たちと、花を活けることで関わりながら生きているんだと感じます。そこには全然欲がなく、誰かを喜ばせたいという気持ちがあるだけ。

お花を贈ることは、愛や祈りを届けるということ。幸せになってほしい、元気になってほしい、そんなシンプルで純粋な気持ちを届けるのが、お花屋さんの仕事なんです。そして花を贈る気持ちにある純粋さ、これは誰の中にもあるものです。それを大人になっても、そしていつまでも、もっと表現していいと思っただけです。生きている今に純粋な自分自身の美しさをたくさん見つけられたら、すごく幸せだと思います。

植物も人間も同じ「生き物」 心と体に良い生活を

自然に触れていれば自分の中に流れる血や、鼓動を素直に感じることでできます。人間も植物も同じ。動脈や静脈があって、小さな種から大きくなります。そういう進化を持っているのが生き物です。でも心と体、両方が健康でないと、疲れたり、気持ちが重くなったり。



私はテレビが苦手だったので、友だちと話が合わず孤独な少女時代を過ごしました。自分が生きていることの素晴らしさを見つけれなかった。でも生死と孤独って別のものだと思えました。孤独は誰もが常に気持ちの底に持っているもので、決して無くならない。ずっとあるものだから、その存在を認めた上で気持ち良く過ごせるところに身を置く方がいいんだと思えました。心にも体にもいい生活を選ぶことは大切だと思います。

悩んでいる人、いませんか？

話すことが解決の第一歩かも知れません。お気軽にご相談ください。

- 障がい福祉課 8:30~17:15
うつ病・依存症などの相談 ☎24-1111
- 健康づくり課 8:30~17:15
心の健康についての相談 ☎24-1111

このほか、各種講座や人権・育児・介護に関する相談窓口などの情報は、本紙「暮らしと情報」(P18~)、「健康と福祉」(P22~)などでもお知らせしています。